

競輪場が果たすべき役割についての研究 ～競輪場をバンクアリーナに～

トップスポーツマネジメントコース

5013A324-8 渡邊俊太郎

研究指導教員：平田 竹男 教授

1. 背景

現在競輪場は、特定ファンのみが観戦し、一般には余り認知されていないものとなっている。来場者平均年齢は60歳を超え、車券売上もピーク時の3分の1程度に落ち込み、入場者数も激減している。近年では収益が上がらず廃止する競輪場や廃止を検討している競輪場が後を絶たない。

競輪の現状をトリプルミッションモデル(平田、2006)で分析すると競輪が他のスポーツに比べて「勝利」「資金」という要素において優位性があるとともに、「普及」面では、チャンスがあるにも関わらず活かしきれていないこと、ギャンブル性が強調されすぎ、スポーツとしての理念が無く、「勝利」「資金」「普及」が全く循環していないことがわかる。

特に日本を除く国では自転車トラック競技のメダル獲得数とトラック競技場の数に相関関係が認められるにも関わらず、日本はトラック競技場(その大半は競輪場である)の数が世界一であるにも関わらずメダル獲得数順位が低いのが特徴的である。日本においても大都市近郊に自転車競技の拠点となるトラックが確保できれば自転車競技の普及に寄与する可能性があることを示した論文もあるが(松倉、2011)、競輪場はギャンブル場としてしか活用されておらず、スポーツ施設として活用されていない。

このような背景から競輪場をバンクアリーナとして開放することこそが競輪再興の処方箋であると確信している。

2. 目的

競輪場を一般の自転車愛好者やスポーツファンも気軽に使い、自転車競技普及の拠点となる新たなバンクアリーナに再生させる可能性を探り、競輪再生への打開策を明らかにすることを本研究の目的とする。

3. 研究手法

下記事項についてアンケート調査を実施した。

(1)オリンピックでのメダル獲得について

対象：①競輪場(千葉・松阪)来場者、②競輪選手、③競輪施行者、④競輪場スタッフ(千葉・松阪・富山)

(2)競輪場を競技場として開放することについて

対象：①競輪場(千葉・松阪)来場者、②競輪選手、③競輪施行者、④市民レース参加者(千葉)、⑤一般人(首都圏・関西圏)

(3)国際ルールでの競輪の開催について(ソフト)

対象：①競輪場(千葉・松阪)来場者、②競輪選

手、③施行者、④一般人(首都圏・関西圏)

(4)国際規格の競輪場設置について(ハード)

対象：①競輪場(千葉・松阪)来場者、②競輪選手、③競輪施行者、④一般人(首都圏・関西圏)

(5)競輪とケイリンについて

i レース内容への面白さについて

対象：①競輪場(千葉・松阪)来場者、②選手

ii 見栄えの良さについて

対象：①競輪場(千葉・松阪)来場者、②選手、

③一般人(首都圏・関西圏)

iii 競輪場への来場意欲について

対象：一般人(首都圏・関西圏)

iv 車券購入意欲について

対象：一般人(首都圏・関西圏)

4. 結果

回答者数は、競輪場来場者合計590名、競輪選手132名、施行者23名、市民レース参加者23名、一般人2080名、競輪場スタッフ328名であった。

(1)競輪選手がメダルを獲ることについて

競輪場来場者の590名の内279名が「非常に良い」、152名が「良い」と回答した。

「東京五輪でメダルを獲得するために業界を上げて最大限の努力をすべき」とした人が選手では132人中85人、施行者では23人中14人であった。

競輪場スタッフ328名の内、選手が世界で活躍することがモチベーションアップに「非常に良い影響を与える」が157名、「良い」が114名で合計では8割を超えた。

(2)競輪場のアマチュアへの開放について

選手132名のうち、「頻繁にレースを開催すべき」92名、「少しはやるべき」22名で、「やるべきでない」とした人はいなかった。

施行者23名については、「頻繁にやるべき」7名、「少しはやるべき」15名で、やはり「やるべきで無い」とする人はいなかった。

実際に千葉競輪場で開催した市民レース参加者23名のうち12名が「自転車トラックレースにもともと興味があったが、参加することにより更に興味を持った」と回答し、8名が「もともと興味がなかったが、参加して興味を持った」と回答した。その他は「トラックレースを良く見る」が1名、未回答が1名であった。

千葉競輪場来場者302名の内100名がアマチュアレースの開催を「非常に良い」と回答し、

87名が「良い」と回答した。「非常に悪い」「悪い」は各1名であった。

(3) 国際ルールでの競輪実施について

来場者590名の内100名が「非常に良い」129名が「良い」と回答し、「非常に悪い」38名、「悪い」31名で、その他は未回答あるいは「どちらとも言えない」であった。

競輪選手については、132名の内、「全てのレースを国際ルールにすべき」9名、「多くのレースを国際ルールにすべき」2名、「一部のレースを国際ルールにすべき」49名、「やらない方が良い」56名であった。

施行者については23名中10名が「一部のレースを国際ルールにすべき」とし、13名が「やらない方が良い」と回答した。

(4) 国際規格の競輪場の設置について

競輪選手は132名の内「全ての競輪場を国際規格にすべき」が8名、「多くの競輪場を国際規格にすべき」が4名、「一部の競輪場を国際規格にすべき」が43名、「国際規格の競輪場は不要」が43名、「どちらとも言えない」が19名であった。

施行者については、23名の内「全ての競輪場を国際規格にすべき」が0名、「多くの競輪場を国際規格にすべき」が1名、「一部の競輪場を国際規格にすべき」が7名、「国際規格の競輪場は不要」が11名、「どちらとも言えない」が4名であった。

来場者は競輪場が国際規格の競輪場になることについて、590名中85名が「非常に良い」、108名が「良い」と回答し、「非常に悪い」「悪い」は各20名であった。その他は未回答あるいは「どちらとも言えない」であった。

(5) i レースの面白さについて

競輪場来場者590名に複数回答可で回答を求めたところ国際ルールのレースが「競輪よりつまらない」が181名、「競輪より面白い」が93名いた。

選手では132名のうち、「競輪の方が面白い」が72名、「競輪の方が面白くない」が4名、「どちらとも言えない」が41名であった。

(5) ii 見栄えについて

競輪場来場者590名に複数回答で回答を求めたところ、国際ルールの競輪が「競輪よりカッコ良い」が78名、「競輪よりカッコ悪い」が20名いた。

選手(132名)においては、自転車のスタイリングについて「競輪の方が格好良い」17名、「競輪の方が格好悪い」60名であった。ユニフォームのデザインについては、「競輪の方が格好良い」12名、「競輪の方が格好悪い」68名であった。ヘルメットについては、「競輪の

方が格好良い」4名、「競輪の方が格好悪い」89名であった。

(5) iii 来場意欲について

一般人2080名に写真を見せてアンケートを取ったところ、普段の競輪開催時に競輪場に行ってみたくと回答した人は66名、記念競輪時の競輪場に行ってみたくと回答した人は131名、国際規格のレースの競輪場に行ってみたくと回答した人が307名であった。

(5) iv 車券購入意欲について

同じく一般人2080名に写真を見せてアンケートを取ったところ、普段の競輪開催時に競輪場で車券を購入してみたくと回答した人は50名、記念競輪時では88名、国際規格のレースの競輪場では185名であった。

5. 考察

(1) 競輪来場者が選手のメダルを獲得を期待していることが分かった。また、来場者は、競輪場がアマチュアの競技場として使われることも良いと考えている。

選手自体は選手がメダルを獲得することを強く望み、競輪の認知のためにアマチュアレースを頻繁に開催すべきと考え、施行者も同様に考えていることが分かった。

これらの結果は、競輪来場者も競輪選手も施行者も、競輪競技が普及し、メダルを獲得して選手のステイタスが上がり、一般の方にも認知してもらいたと考えているからと考えられる。

そうであれば、競輪場を自転車競技の普及の拠点として活用することは可能といえる。

(2) オリンピックでのメダルを獲得のためには国際ルールによる競輪の開催が有用であると考えられるが、半数以上の選手も同様に考えており、更に、来場者も開催を望んでいる人が多数である。更に国際規格の競輪場の設置について、選手も来場者も望んでいる。

(3) 国際規格のバンクによる国際規格のレースは見栄えも良く、実際に一般の方の来場、車券購入の意欲も今までの競輪に比べて著しく高い。更にルールも簡単で予想がしやすいことを踏まえると競輪の新規ファン獲得の起爆剤になる可能性が大である。

反対に、国際規格のKEIRINよりも今の競輪の方が面白いという意見が多数である。このことからすると、KEIRINと競輪は共存すべきであり、KEIRINで獲得した新規ファンが競輪に移行する可能性が極めて高いと言える。

6 結論

競輪場を自転車競技の普及拠点にすることは必要かつ可能であり、そのことが新たな競輪ファンの獲得、競輪の再生に繋がると考える。

